

病気への先入観改める

影本菜穂子記者

健幸記



取材をしていると、病気に
対し、自分が凝り固まっ
たイメージを持っているこ
とに気付かされる。例えば
認知症だ。看護師をしてい
た経験からか、できないこ
とが増えていくのがどうし
ても気になり、どんな支援
が必要なのかという視点で
考えてしまう。

認知症専門医の山口晴保
さんは、診断時に「今日か
ら堂々と、もの忘れをして

も幸せに過すにはどうし
たらいいか？ 見方を変え
るだけで、視野が広がる。

14日までの「医療ルネサ
ンス」で掲載した双極性障
害の取材でも、先入観は壊
された。気分が高ぶる「そ
う」と沈み込む「うつ」を
繰り返す病気で、芸術家や
作家の患者も少なくない。
当初は、どこか「創作的」
という印象さえあった。

ところが、「そう」期間
はあつという間のことも多
い。その後長く続く、深
い「うつ」が何よりもつら
い――。患者さんが語る体
験に驚かされた。

取材を通じ、凝り固まっ
た認識を改めながら、少し
でも病気の实情に迫る記事
を届けていきたい。

いいですよ」と患者へ伝
えるのだという。認知症で
も、今まで通りべきのこと
はたくさんあり、心豊かに
暮らしていける。認知症は
「長生きの勲章」だと、著
書「認知症ボジティブ！」
(協同医書出版社)で記す。

認知症の人が安心して暮
らすには？ 家族や介護者